

道徳における限界から考察する道徳教育の可能性

— 「言語ゲーム」と「他者の悪魔化」の概念を用いて —

伊藤 雅一

千葉大学大学院人文社会科学部 博士後期課程

歴史的に二項対立論争になりがちであった道徳教育は理論研究の蓄積が乏しいとの指摘があり、道徳の本質を問う議論が起こっている。その一方、何となく道徳的行為をしている日常生活では道徳の本質を問う道徳観は表出していない。そこで、視点を変えて道徳における限界を見ていくことで、道徳の境界を把握し、道徳教育の理論研究の一部を担うことを試みる。道徳的行為を「言語ゲーム」として見た時、道徳をあらかじめ規定する困難がある一方、道徳世界の存在が道徳を遵守すべきだという当為論を可能にしている。また、「言語ゲーム」という境界は他者を意識させるため、他者性と関連した道徳教育の実践に接続しうる。ただ、実際には「他者の悪魔化」という他者機能があり、実践は容易ではない。道徳の本質論・道徳教育をめぐる議論・日常生活における道徳観の三者それぞれの「言語ゲーム」が接するオルタナティブな「言語ゲーム」の開始が求められている。

キーワード：道徳教育、特別の教科である道徳、言語ゲーム、他者の悪魔化、モラルジレンマ

1. はじめに

2015年3月27日、学校教育法施行規則の一部改正をする省令と学習指導要領の一部改訂が発表された。この2つにより、「道徳」は「特別の教科である道徳」と改められることが決定し、小学校は2018年度、中学校は2019年度から「特別の教科である道徳」が完全実施される。

それに前後して道徳教育に関するさまざまな議論が盛んに交わされている。これまでも、道徳教育に関する政策的議論によって道徳教育の趣旨や形式が変更される前後に、道徳教育に関する議論が顕在化してきた。第二次世界大戦後、修身科の廃止と社会科の登場した1947年度・「道徳」の時間を特設した1958年度・「期待される人間像」が提示された1965年以降の学習指導要領の改訂による道徳教育重視の流れ等、いくつかの節目ごとに道徳教育が盛んに議論されてきた(柴田 2002)。

こうした日本における道徳教育の歴史的変遷の中でも「道徳の教科化」は、教科書や評価方法など明示の難しいと考えられるものを提示しなければならない形式上の変更と、道徳の内容をどのように教科教育として体系化するかという内容上の変更が求められるため、大きな節目といえる。

この節目に際して、本稿では道徳教育に関する理論研

究を志向する立場から、ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」という概念を引きつつ道徳教育について検討していく。なぜ理論研究という立場を選択したかについては次節にて述べていく。

2. 道徳とは何かという問い

2.1. 道徳教育における理論研究の必要性

道徳教育の研究者である貝塚茂樹は、道徳教育が政治的なイデオロギーの争点¹とされてきたため、道徳教育論議は「思考停止」(対案のない賛成/反対論のぶつけあい)していたと指摘している(貝塚 2015: 32)。その上で、道徳教育をめぐる構造的変革として今回の「道徳の教科化」の動きを推奨している。

ただし、貝塚は「特別の教科である道徳」について手放しには喜べないとも指摘している。その理由として挙げられているのが、大学の教員養成や道徳の「専門免許」に十分な対応がされておらず、理論研究の充実が難しい点である(貝塚 2015: 4)。貝塚によれば、現状の道徳教育の形骸化は、大学の理論研究が「貧困」であることに端を発しているという。

道徳教育が教科でないことは、道徳教育の深刻な理論研究の「貧困」をもたらし、それが大学での教員養成、教育実践(授業方法)に深刻な「負のスパイラル」をもたらしているのである。(貝塚 2015: 35)

そこで、「道徳の教科化」は、大学の教員養成に道徳

Masakazu ITO: Possibility of Moral Education from a Moral Limits View: Making Use of the Concepts "Language-Game" and "Demonization of the Other"
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
Chiba University

教育が今以上に位置づき、理論研究の充実を軸とした「正のスパイラル」へと転換する契機と期待しているのである²。

貝塚の主張から、現状の道徳教育において理論研究が乏しい状況であることが見出せる。本稿では、道徳教育の要／不要論については論じないが、いずれの立場にとっても道徳教育の理論研究が蓄積されていくことは必要なことであると考えられる³。よって、本稿では理論研究という立場を選択していく。

2.2. 道徳教育の理論研究が示す道徳の定義

こうした道徳教育に関する理論研究の乏しさが指摘される中、そもそも道徳や、道徳教育によって身につくとされる道徳性について、根本的な議論がされてこなかったことが指摘されている。教育哲学を専門とする井藤元、高宮正貴、苫野一徳の3人は、道徳教育の本質に迫るべく思想家たちのテキストを参照している（井藤・高宮・苫野 2015）。それによると、道徳教育について「道徳の教科化」をめぐる政策的文言の中からは記述が曖昧で道徳教育の本質を見出せないこと、先の貝塚茂樹の議論を参照して道徳教育の議論がいわゆる「文部省対日教組」という政治的な対立構図のもとイデオロギー論争に終始していた歴史的経緯を指摘している。

その後、高宮はJ.S. ミルの観点に基づく道徳教育論（規範と価値の区別）、苫野はヘーゲル倫理思想（「相互承認」に基づく道徳性の本質）、井藤はシュタイナーの芸術論（自然と美とのかかわりを主軸に据えた道徳教育）についてそれぞれ言及している。

3. 道徳とは何かを問うことの限界 ～道徳という言語ゲーム

3.1. 道徳とは何かを問うことの限界

こうした道徳の本質を問う理論研究は、道徳教育をめぐるイデオロギー論争の次元でも、理論研究をふまえた道徳教育の要／不要論においても、道徳教育の根底を問う重要な議論であると考えられる。先に挙げた哲学者のテキストから見出す道徳の本質は、道徳が論理の蓄積を経てどのように定義されているかという観点だと考えられる。

ただ、そこで見出される道徳の本質と道徳教育における理論研究や授業実践とはどのように接続していくのだろうか。更に言ってしまうえば、私たちの日常生活において道徳的行為は何となく行われており、論理の蓄積に根ざしているわけではないことが多いだろう。ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの言葉を借りれば、道徳の本質論・道徳教育をめぐる議論・日常生活における道徳観の三者それぞれの「言語ゲーム」が行われており、道

徳の議論における限界であるようにも思える。その根底には、道徳とは何か問うことの限界があるのではないだろうか⁴。そこで、本稿では視点を変えて、ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」をめぐる議論から、道徳とは何か問うことの限界について論じていく。そのことが、道徳や道徳教育が成り立つ境界を見出しうるという意味で、道徳教育に関する理論研究の一部を担うと考えられる。

3.2. ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」

ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」とは、『哲学探究』（以下、「探究」）の中に登場する概念である（Wittgenstein 1953=2013）。飯田隆の解説によれば、「探究」は、さまざまな例と比喻を用いつつ、2つのテーマを論じているという（飯田 1997: 212-213）。1つは、言語的表現の意味と理解に関して生じる誤解の根を断ち切ることで言語の働き方についての「全体的眺望」を与える試みである。もう1つは、その「全体的眺望」の障害となる心的な事柄への伝統的見解を批判すること（感覚や知覚や思考について語るための言語の使用における誤解の根を断ち切る試み）がテーマとされている。

言葉に意味を吹き込むのは、「意味すること」、「理解すること」、「解釈すること」といった心的過程ではない。言葉が意味をもつのは、まさにそれが使用されている限りのことである（飯田 1997: 233）

このテーマを端的に表わしているのが「言語ゲーム」である。ヴィトゲンシュタインは言う。

単語の意味とは、言語におけるその使われ方である（「探究」43節）

「ルールにしたがう」ということは、実際にそうすること[実践]なのである。そしてルールにしたがっていると思うことは、ルールにしたがっていることではない（「探究」202節）

言語の意味は、ある規則に沿った言語の使用「言語ゲーム」によって成立している。例えば、「痛み」について意味することを説明する場合、ついその意味を具体的な経験（転んだなど）や科学的な定義（痛覚の反応など）で説明しようとするが、「痛み」の意味することの説明は際限なく続いてしまう。そこで、ヴィトゲンシュタインは言う。

私たちのミスは、事実を「原現象」と見るべき場所

で、説明を求めていることだ。つまりそこでは、「この言語ゲームをやってるんだ」と言うべきなのである。(「探究」654節)

「言語ゲーム」は「原現象」であるため、あらかじめ決まった規則が何か説明しようとはしないのである。野家啓一の解説では、言語ゲームとは現実に行われている「事実」の記述であると同時に、プリミティブな言語の使用法を考察する哲学の「方法」でもあるとされている(野家 2013: x-xi)。

本稿の題材に沿って端的に言ってしまうと、ある道徳的行為(「言語ゲーム」)の数だけ道徳(規則)があり、道徳が機能している一方で、その道徳は前もって定義づけられているわけではないということになる。また、こうした見方(方法)を提供してくれるのが「言語ゲーム」という概念でもある。「言語ゲーム」は、私たちの何となく道徳的行為をしている日常生活(ヴィトゲンシュタインの言う「生活形式」⁵⁾)の目線から論じられているのである。

3.3. 道徳と「言語ゲーム」

馬場智理は、道徳と「言語ゲーム」を関連させた議論をしている(馬場 2013)。馬場は、「道徳が遵守されなくても、当為として道徳的行為を行うことが可能か」という問いに回答する形で論を進めていく。その中で、道徳的行為を「言語ゲーム」、道徳を規則と置き換えることで「言語ゲーム」の概念を採用している。そして、まずは、誰もが道徳を遵守すべきであることまでを「理論的」に根拠づけることの困難について述べている。

言語ゲームが成立する場面において、その規則をあらかじめひとつに規定することはできなかつた。そのため、どのような規則によって言語ゲームが成立しているかは、実際に成立した後でしか判明しなかつた(馬場 2013: 37-38)

つまり、あらかじめ道徳の遵守を万人に提示することは理論上できない。更に言えば、道徳的行為の成立は行為に関わる各人による複数の道徳が成立していることを予期させる。

馬場は、続けて、道徳的行為を行うにあたって道徳と他の規則との間で優劣を決定することはできない点を述べる。規則の優劣を決めるためには、それを根拠づける道徳的行為や規則を見出し共有する必要があり、どこまでも根拠づけが連鎖してしまう。よって、馬場は、道徳と他の規則との間で優劣を決定することはできないことを指摘している。

そして最後に「なぜ道徳に従うべきか」という問いに

対しては「そうするものだから」と答えるしかない点について言及していく。

言語ゲームは、規則が相対的であるとしても、それでも意思疎通している日常の言語使用の事実性に目を向けるものであった(馬場 2013: 38)

以上の点を確認した上で、道徳が説明不可能でも道徳的行為が成立している現状から、道徳に従うべきなのは、道徳的行為がそう成り立っているからだ、という返答くらいしかできないと述べている。これは問いからの逃避ではないとしている。

多様な規則に従って道徳的行為を行っている道徳世界のあり方を説明したものである(馬場 2013: 39)

そして、実践的な道徳世界の存在が道徳的行為を行うべき当為性を生み出している点を述べている。道徳的行為が実践され続ける限り、そこでの道徳について理論的な定義をあらかじめ与えることはできないが、道徳に従うべきだという主張は成立するのである。

野家の言い方に従えば、「言語ゲーム」としての道徳的行為とは現実に行われている「事実」としての記述であると同時に、そこでの道徳を考察する哲学の「方法」でもある。

道徳と「言語ゲーム」を関連させた議論は、私たちの何となく道徳的行為をしている日常生活から、道徳を理論的に説明することは容易ではないと理解させる。その一方、「言語ゲーム」による境界が、道徳や道徳的行為が多様であるという見方を提供してくれた。実践的な道徳世界の存在が多様なものから成り立っているという解釈は、道徳教育の展開に寄与すると考えられる。

4. 「他者の悪魔化」という問題 ～悪魔化による道徳的行為の遵守

4.1. 道徳教育における他者

道徳教育を考える上で、馬場のように「道徳が遵守されない」ということを想定することは重要だと考えられる。馬場は議論の最後に、「他者」との関係を読み取ることを促している。ある「言語ゲーム」が成立するとき、そこにおける規則を共有しない「他者」が存在するという視点を提供しているという(馬場 2013: 39)。「言語ゲーム」の外部にまた別の「言語ゲーム」が存在すること、ある道徳が通用する外部に別の道徳が存在することを認識することは道徳教育の目指すところではないだろうか。

貝塚は、他者について「日常的な水平的な関係」と「垂直的な縦軸の関係」の2つを挙げている(貝塚 2015: 45)。日常的な水平的な関係とは、自己、他人、社会、国家、人類など日常的に触れるものを指している。もう一方の垂直的な縦軸の関係とは、祖先、死者、歴史、神、仏、自然など超越的な存在との関係を指している。日本の道徳教育において不足しているのは後者だとし、宗教教育などの展開が必要だと述べている。

「言語ゲーム」に引き寄せて言えば、複数の「言語ゲーム」としての道徳的行為と接する道徳教育が望ましいということになる。

4.2. 悪魔化による道徳的行為の遵守

ただ、複数の「言語ゲーム」と接する実践は困難であるかもしれない。その困難さを明確に説明しているものにジョック・ヤングの「他者の悪魔化」という議論がある(Young 1999=2007)。ヤングによれば、道徳的な多様化や選択肢の増大は存在論的不安を生み出し、その不安を払拭するための手立ての1つとして「他者の悪魔化」が起こっているという。

他者を悪魔に仕立てあげることが重要なのは、それによって社会問題の責任を、社会の「境界線」上にいるとみられる「他者」になすりつけることができるからである。このとき、よくあることだが、因果関係の逆転が起こる。社会に問題が起こるのは、実際には、社会秩序そのもののなかに根本的な矛盾があるからなのだが、そう考えるのではなく、社会に問題が起こるのは問題そのもののせいだ、と考えるのである(Young 1999=2007: 285-286)

新谷周平は大学における道徳教育の講義を省察し、言う「他者の悪魔化」を見出しつつ省察を重ねることで道徳教育の困難さを論じている(新谷 2009)。

性犯罪を取り上げたテレビ番組を元に、受講者が議論やコメントカードの記入を行って行く中で、受講者と性犯罪の加害者／被害者と受講者の距離、更には番組制作者や授業との距離のあり方を省察していく。受講者は、その多くが性犯罪の加害者／被害者との距離を置き、自分とは別世界の存在であるように捉えていた。受講者どうしの議論や授業者の見解などを経て、メディア批判をする受講者、相対主義的な見解に移行する受講者、当初からの見解を変えない受講者などを見出した。

新谷はこれを省察することで、受講者自らの道徳性を維持するために「他者の悪魔化」を「道徳的」に選択していることを見出した。具体的には、さまざまな見解を知った後も「他者の悪魔化」の対象が変わっただけのケース(メディア批判へ移行)、自らの省察にある程度至

ったケース(相対主義的な見解へ移行)、自らの道徳性の揺らぎに耐性のないケース(当初からの見解のまま)などを見出している⁶。

新谷の議論を「言語ゲーム」に即して言うならば、複数の「言語ゲーム」としての道徳的行為と接する道徳教育を行ったとしても、自らの「言語ゲーム」は変更されずに、他者認知の切り替え(「他者の悪魔化」)による対応をしているケースが少なくない、ということになるか。あるいは、多元性への耐性が無い場合、自らの「言語ゲーム」の内側(規則の変容など)と外側(他の「言語ゲーム」との関係性など)ともに変更されないということが指摘できる⁷。

5. おわりに

5.1. 実践方法モデルの必要性

本稿では、ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」をめぐる議論から、道徳とは何か問うことの限界について論じてきた。

道徳と「言語ゲーム」を関連させた議論は、私たちの何となく道徳的行為をしている日常生活(日常生活における道徳観)から、道徳を理論的に説明することは困難であると理解できる。その一方、道徳や道徳的行為が多様であるという見方(境界の存在)を他者の観点から提供しており、道徳教育の展開に寄与すると考えられる。具体的には、複数の「言語ゲーム」としての道徳的行為と接する道徳教育が望ましいということになる。

しかし、ヤングの「他者の悪魔化」をめぐる議論や、その議論を実際の道徳教育の分析に用いた新谷の論からは、道徳教育として複数の「言語ゲーム」と接する実践を構成することに困難が伴うことが見出された。

こうした困難を克服しつつ展開する道徳教育の構想が求められる。新谷は、先の議論の課題として「省察的な実践方法のモデル化」の必要性を挙げている。次項では、一例としてのモラルジレンマ授業に簡単に触れて本稿を綴りたい。

5.2. 自らの道徳と他者の道徳が会う道徳教育

～一例としてのモラルジレンマ授業

複数の「言語ゲーム」が並存しているという議論を聞いて、道徳教育におけるモラルジレンマ授業を思い浮かべる人もいないのではないだろうか(荒木 2007)。モラルジレンマ授業とは、コールバーグの道徳の発達段階理論に基づいたモラルジレンマ資料を元に話し合いをする授業のことである。認知能力と役割取得能力の向上による道徳性の発達が前提となっており、それらの能力を伸ばす機会としてモラルジレンマ(道徳的価値葛藤)を経験できる資料を扱う(荒木 1996: 159-160)。「言語ゲー

ム」に即して言えば、複数の「言語ゲーム」どうしが接することで生じるモラルジレンマを扱うことが、馬場の言う「他者」存在との対峙場面として想定される。

ただ、モラルジレンマ授業には、多くのモラルジレンマ資料がストーリーの簡潔さゆえ二者択一になっている点や、資料によってはモラルジレンマに至らない解決があるという点(森岡 2002: 68-69)、そもそもモラルジレンマを回避する傾向がある(浅川 2013: 43)といういくつかの批判もされている。こうしたモラルジレンマ授業の限界を考慮すると、複数の「言語ゲーム」に接するような資料設定には至っていないように考えられる。ある程度の普及と評価を得ているモラルジレンマ授業がこうした状況であることを考えると、現状の道德教育は複数の「言語ゲーム」に接する実践には至っていないと思われる。

ただ、モラルジレンマ授業をめぐる議論を見ると、いかに理論研究が重要であるかを示唆していると考えられる。コールバーグの理論検討やモラルジレンマ資料の教材検討など具体的な理論研究が蓄積されている。道德の本質論・道德教育をめぐる議論・日常生活における道德観の三者それぞれの「言語ゲーム」の接するオルタナティブとしての「言語ゲーム」の開始が求められている。

¹ 二項対立になりがちな道德教育をめぐる論争について、柳沼良太は、道德教育・道德授業・道德教科書・道德の評価の4つの観点から概観している(柳沼 2013: 27-31)。その上で、実際は二項対立ではなく「グラデーション」があるため、より具体的で建設的な議論の展開を望んでいる。

² 教科化することと理論研究が進むことの因果関係には、異論があると思われるが別稿にゆずりたい。ここでは、道德教育における理論研究が乏しい状況の把握に注目するにとどめる。

³ 道德教育研究における理論研究や授業実践研究などの蓄積に基づいた議論でなければ、貝塚が問題視するイデオロギー論争の繰り返しになりかねないと考えられる。

⁴ 道德とは何かを問うことの限界について述べているのであって、道德の定義を議論することは意味がないという主張をしたいのではない。ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』(以下、「論考」)では、言語が定義できる限界を追及がされており、高い評価を受けている(Wittgenstein 1922=2014)。

⁵ 「論考」では「論理形式」の追求であるのに対し、「探究」では「生活形式」の追求へと移行したと論じられている(野家 2013: xi)。

⁶ ヤングは、「他者の悪魔化」について、他者と距離をとること、本質化された他者に責任を負わせること、自分たちの正常性を再確認することの3つの要素があるとしている

(Young 1999=2007: 293)。新谷の見出した各ケースもこれに近いと考えられる。

⁷ なお、新谷自身は、道德教育によって受講者がある方向へ一元化することを望んではいないし、相対的な思考を身につけないことを悪魔化しているわけではない(新谷 2009: 114-115)。

引用文献

- 荒木紀幸 (1996) 『モラルジレンマ授業の教材開発』 明治図書
 ——— (2007) 『モラルジレンマで道德の授業を変える』 明治図書
 新谷周平 (2009) 「道德教育の省察的实践—他者の悪魔化と対話による超克の可能性と限界—」 『千葉大学教育学部研究

- 紀要』第57巻、pp.109-117
 浅川和幸 (2013) 「道德教育論を考える」 『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第119号、pp.27-50
 馬場智理 (2013) 「道德の根拠への問い覚書(2)」 : 言語ゲームとしての道德」 筑波大学倫理学言論研究会 『倫理学』29号、pp.27-40
 飯田隆 (1997) 『ヴィトゲンシュタイン—言語の限界』 講談社
 井藤元・高宮正貴・苦野一徳 (2015) 「道德の本質および道德教育への示唆—J.S ミル、ヘーゲル、シュタイナーの視点から—」 『大阪成蹊大学紀要 教育学部篇』第1号、pp.181-191
 貝塚茂樹 (2015) 『道德の教科化—「戦後70年」の対立を超えて—』 文化書房博文社
 森岡修一 (2002) 「道德性の発達」 柴田義松編著 『道德の指導』 学文社、pp.39-76
 野家啓一 (2013) 『「哲学探究」への道案内』 丘沢静也訳 『哲学探究』 岩波書店、pp.vii-xxiii
 柴田義松 (2002) 「道德教育の歴史」 柴田義松編著 『道德の指導』 学文社 pp.9-38
 Wittgenstein, Ludwig Josef Johann. *Logisch-philosophische Abhandlung* (1922) (=2014 丘沢静也訳 『論理哲学論考』 光文社)
 Wittgenstein, Ludwig Josef Johann. *Philosophische Untersuchungen* (1953), *Auf der Grudlage der Kritisch-genetischen Edition* (=2013 丘沢静也訳 『哲学探究』 岩波書店)
 柳沼良太 (2013) 「「教科化」に賛成派と反対派の主な主張」 押谷由夫・柳沼良太編著 『道德の時代がきた!—道德教科化への提言—』 教育出版、pp.27-31
 Young, Jock. *The Exclusive Society Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity* (1999) : SAGE Publications (=2007 青木秀男他訳 『排除型社会—後期近代における犯罪・雇用・差異』 洛北出版)